

第31回 福島県建築文化賞 総評

福島県建築文化賞は、東日本大震災により2年間中断したが、昨年度、節目の第30回として再開し、本年は再開後2回目となる。

今回の応募作品は合計30件で、うち公共建築物が15件、民間建築物が15件であった。用途別では、学校教育施設が8件と最も多く、次いで文化・スポーツ施設等、商業施設等が各5件、庁舎・事務所等、古い建築物の修復、建築物群又は建築物等が各3件、福祉・医療施設等、共同住宅、複合施設が各1件であった。また、地域別では、浜通り4件、中通り18件、会津8件であった。

応募傾向として、民間の応募割合が増えたこと、学校教育施設が多かったこと、大震災等の影響もあって、前回同様に浜通りからの応募が少なかったことなどがあげられる。

一次審査は8月12日に公開で、書面による現地審査対象作品の選考が行われた。審査方法としては、各審査委員が事前に全ての応募書、図面、写真に目を通して審査会に臨み、当日会場に用意された応募書類に直接目を通して確認の上、現地審査の候補として推薦する作品を11点以内で投票した。その結果をもとに、多くの審査委員が投票した作品や、少数であっても強く推薦したい作品について意見を述べ合い、内容を確認するとともに共通理解を深めた。議論を尽くした結果、最終的に14作品を選定した。その内訳は、公共建築物が8作品、民間建築物が6作品であり、地域別では、浜通りが3作品、中通りが6作品、会津が5作品であった。

二次（現地）審査は10月に延べ3日間にわたって、全審査委員により、一次審査で選定された14作品について行われた。各審査委員は、周辺環境との調和、建築物のデザイン・機能性、東日本大震災からの復興に対する貢献など、賞の基準に照らし多角的な視点から評価を行い、正賞、準賞、優秀賞として5作品、特別部門賞として3作品、復興賞として3作品を、評価理由を添えて推薦した。

最終審査は11月11日に、7名の審査委員全員出席のもとで行われた。はじめに各審査委員が推薦する作品の評価ポイント等について説明した後、委員間で真摯かつ率直に意見交換を行い、本賞の趣旨「建築文化」にまで遡って検討がなされた。推薦する作品の評価が拮抗し、議論は白熱したが、最終的に全会一致で、下記のとおり、正賞1点、準賞1点、優秀賞3点、特別部門賞2点、復興賞3点の受賞作品が選定された。

ここに各賞の作品選評をまとめて報告する。詳しくは受賞作品ごとの講評を参照されたい。

正賞の『猪苗代のギャラリー』は、東日本大震災で半壊し、骨組みだけ残った蔵を伝統的な曳家工法で移築させるとともに、現代的な感性を付加して見事に再生させた。120年以上の時を経た貴重な建物・建築文化を保存・活用したことは、それ自体に大きな意義があるが、加えて土蔵の再生と建物にまつわる物語を再構築しながら、現代感覚の建築空間を創り出している。このような建築に向かう姿勢、取組が正に建築文化であると高く評価された。

準賞の『会津坂下町立坂下東幼稚園』は、学校林を生かした丸太や地場産材を用いて、様々な木造架構・アイデアにより、この土地ならではの子供の空間を創り出している。随所に子供たちの身体スケールにあった遊びの空間が創られ、幼児の身体と夢を育むための工夫

がなされている。木を大切に使って建築された力作であり、地場産材を生かした今後の建築づくりの糧となることが期待される。

優秀賞には、『認定こども園 ぼだい樹西こども園 西保育園』、『尾瀬書美術館「思郷館」』、『いわき芸術文化交流館アリオス』の3作品が選ばれた。

『認定こども園 ぼだい樹西こども園 西保育園』は、建築主が所有する寺の山から切り出した杉丸太、円形の架構、寄せ木の床で構成された吹抜けの遊戯ホールを中心に諸室が連続的に配置され、子供の施設に求められる開放感やぬくもりを醸し出している。

『尾瀬書美術館「思郷館」』は、尾瀬の雄大な自然の一角にあって、自然と調和して佇む一方、シンプルで印象的な外観デザインは風景に刺激をもたらし、個人ギャラリーをさわやかな設計手法で完成させている。

『いわき芸術文化交流館アリオス』は、いわき市の文化交流活動の拠点として整備され、優れた機能性や音響性能を備えるとともに、運営体制を確立することにより、文字通り市民が集い、活動する場となっており、また公園と一体になって街の賑わいを生み出す憩いの空間を創り出している。

特別部門賞には、『地形舞台ー中山間過疎地域に寄り添う集落づくり拠点ー』、『檜枝岐歌舞伎伝承館 千葉之家』の2作品が選ばれた。

『地形舞台ー中山間過疎地域に寄り添う集落づくり拠点ー』は、空き家となっていた築100年の古民家を再生し、外部に地形と一体となった舞台を創り出した。地域文化を継承し、結の伝統を守る中で、外から若者が惹かれてくる姿が見え、新たな息吹の感じられる意欲的な取組として着実な発展が期待される。

『檜枝岐歌舞伎伝承館 千葉之家』は、地域の文化遺産である伝統歌舞伎の舞台に隣接し、歴史ある佇まいに馴染むよう周辺の景観と調和が図られている。地場産材と伝統工法を活用した木造建築は、伝統芸能を後世に受け継ぐと同時に文化・技術の保存・伝承に貢献している。

復興賞には、『福島トヨタ自動車株式会社 本社』、『浪江 in 福島ライブラリー きぼう』、『相馬井戸端長屋（馬場野地区災害公営住宅建設工事）』の3作品が選ばれた。

『福島トヨタ自動車株式会社 本社』は、東日本大震災の経験から、地域と共に生きる企業姿勢を改めて大切にし、地域復興の一翼を担う避難施設としても使用できるよう、社会性、公共性、環境問題を意識した積極的な計画を実現させている。

『浪江 in 福島ライブラリー きぼう』は、浪江町の応急仮設住宅に近接する仮設建築物であり、避難住民や地域住民の憩いの場となっている。将来、移築可能な構法や材料を採用し、無駄な要素を削ぎ落とした空間はシンプルで潔い。浪江の故郷に持ち帰る日が一日も早く叶うことを願うとともに、移築後の「きぼう」の姿を楽しみに見届けたい思いがする。

『相馬井戸端長屋（馬場野地区災害公営住宅建設工事）』は、東日本大震災後、全国で最も早く完成した公営住宅で、被災者の生活をいち早く復興させる趣旨から、限られた時間の中で高齢者対応やコミュニティ確保を最優先に計画した、住宅復興の代表例と言える。

最後に、今回の応募作品は、非常に強い印象の小規模な建築、復興期の福島に相応しい建築が拮抗しながら見受けられた。また、毎年のことであるが現地審査においては、設計・施

工に携わった担当者が楽しそうに説明してくださるのが印象的であった。審査を通じて建築文化とは何か、文化として何を継承していくべきか改めて考えさせられた。設計者、発注者、使用者等の建築や地域に関わる人達の思いと努力の積み重ねの上に、建築とまちの歴史が生まれ、継承され、建築文化が形成されていくことが、今回の受賞作品を通じて多くの人々に共有されることを願っている。

また、復興賞作品からは、厳しい条件の中で、関係者の意欲と行動によって生み出された建築が、地域復興に寄与するとともに、避難者の生活に潤いや希望を与える力を持つことを感じとることができるだろう。

惜しくも選外となったが、『OPERA KINBIDO』は、粗野な原石のファザードが遠望にも目を惹いて存在感を示している。『三春町立三春中学校』は、山間の自然環境と溶け込むように調和して、ゆったりと落ち着いた学びの空間が確保されており、吹抜けのホールが開放感を生み出しているのが印象的であった。『介護老人保健施設 多生苑猪苗代』は、ユニット（個室群）内での共同生活室やループ動線の採用、管理しやすいサービスステーションの配置など巧みに計画されている。『市営程田明神前団地（災害公営住宅）』は木造戸建住宅による和風の街並みがデザインされている。いずれも建築主、設計者、施工者の姿勢が高く評価される作品であった。

審査委員長 長澤 悟